

Gyanendra Pandey,

*A History of Prejudice:
Race, Caste, and
Difference in India and
the United States.*

Cambridge: Cambridge University Press,
2013. xv + 243pp.

しが みわこ
志賀 美和子

はじめに

ギャネンドラ・パーンデーは、その活発な著作活動の中で常に、近代国家を彩るさまざまな言説、すなわち自立した個としての市民の成立とその平等性、合理性、民主制などに鋭い批判的分析を加え、これら公式の説明の陰で周縁化された人々に光を当ててきた。とりわけPandey [2006] で、インドにおいてはヒンドゥー教徒が定義される必要のない「無標の市民」、つまり標準とされ、ムスリムやキリスト教徒などが「有標の市民」、つまり標準から逸脱した存在として周縁化され、日常的暴力の対象となったと指摘した。その後は視野をアメリカに広げつつ、近代国家に内在する幻想／欺瞞を明らかにする著作を立て続けに発表してきた [Pandey 2010; 2011]。本書は、このようなパーンデーの仕事の集大成と位置づけられるものである。以下、内容を概観し、評価を試みる。

I 本書の構成と内容

- 第1章 はじめに
 第2章 違いとしての偏見
 第3章 ダリトの改宗——同一性の顕示——
 第4章 「二重の勝利」——日常の中の人種関係——
 第5章 アフリカン・アメリカン自伝——違いを再配置する——

- 第6章 ダリトの記録——身体を書き換える——
 第7章 根強い偏見

第1章では、本書のアプローチと方法が記されている。本書の目的は、近代における偏見の歴史、具体的には「不可触民」(ダリト)とアフリカン・アメリカンが他者化されていく過程を描くことである。本書は一貫して、近代社会は合理的で偏見から自由であるという主張は妥当か、と問いかける。ここで鍵概念として2種の「偏見」が提示される。第1は、「ダリト」や「黒人」、ユダヤ人などに対する、可視化され一般にも認識される偏見である。この偏見は、偏見から自由とされる近代社会においては「逸脱」した「例外」的行為とみなされてきたため、著者は「ヴァナキュラーな偏見」と名づける^(注1)。一方、近代社会には、常識として通用し、偏見と認識すらされない偏見が存在するという。近代社会は、何が「近代的」で「合理的」で「正しい」かを、支配的グループが決定してきたため、表面化されない偏見を内包しているのである。これを著者は「普遍的な偏見」と名づける。

支配的グループとはミドルクラスの白人男性を指す。近代社会においては、個人の達成と能力がものを言う社会が理想的とされ、ミドルクラスになることが近代的個人共通の希望となった。しかし「ミドルクラス」から労働者や女性、黒人、不可触民は排除された。こうして特定グループが「自然な」「無標の」市民とされる一方で、その他は二級市民扱いされたが、それが当然とされ、偏見として認識されてこなかった。この認識されない偏見の歴史を描くために、本書は「偏見の政治」を「違いの政治」として描いていく。なぜなら偏見とは、「自然さ」の指標を規定し違いを宣言する行為に表れるためである。

第2章では、サバルタンの諸コミュニティは既存のものではなく、支配的グループを標準に「違い」を印づけられることによって形成されると主張する。近代国家とその支配グループは、ジェンダー、人種などの違いを強調し、ダリトや黒人を「異なる」「市民としての準備が整っていない」ものとして、労働力保持のために従属化してきた。一方、従属させられた女性や黒人、ダリトも、同一性を主張するのではなく、むしろ違いを主張することによ

て階層を上げようとする場合がある。つまり、「違い」とは、天賦のものでも遺伝的に受け継いだものでもない。「違い」を宣言して政治的操作を行うのである。たとえば、ダリト出身でダリト解放運動の指導者であったアンベードカルは、ダリトはヒンドゥー教徒とは異なるマイノリティであると主張した。ただし、「不可触民」とも「被抑圧階級」とも称される集団を際立たせる「違い」がヒンドゥー社会内部での差別経験しかない点に、矛盾があった。ダリトは、ヒンドゥー社会に規定される一部であり、かつ一部でない、内在的部外者であった。また、アフリカン・アメリカンは、ダリトとは対照的に「自然な」コミュニティにみえるが、実はそうではないという。「アフリカン・アメリカン」という範疇も、内在するさまざまな違いを隠蔽して初めて効力をもった。つまり、運動がコミュニティを生み出すのであって、既存のコミュニティが運動を通じてアイデンティティを自覚するのではない。このような「～になる政治」ゆえに、コミュニティと主張されたものの内部の偏見や差別がサバルタンの運動自体によって軽視されてきた、と著者は指摘する。

第3章は、ダリトのさまざまな「改宗」の背景と意味を探る。本書における「改宗」とは、ひとつには、市民への参入を意味する。もうひとつは、ダリト、非ダリト双方を近代的なるものへと変換させることを指す。ダリトは、マイノリティの地位を主張することを通じて、留保制度などの恩恵を獲得するだけでなく、平等な市民になることを目指した。しかしそのためには、インド社会、とくにヒンドゥー社会を再構成する必要がある、アンベードカルはヒンドゥー法案を導入したのである。しかし、「不可触民」のアンベードカルがヒンドゥー社会を語る資格があるのか疑問視された。図らずもダリトとヒンドゥー社会との関係の矛盾が露呈し、ダリトの間で宗教的改宗を望む声が高まった。ヒンドゥー教から自由、平等、博愛を核とする近代的な「我々の宗教(仏教)」に改宗して初めて、ダリトはスタートラインに立ち、村落から都市へ移動し、きちんとした衣服やマナーを身に付け、身体書き換えを実行することができたのである。

第4章は、第二次世界大戦期にアフリカン・アメリカンが、国土防衛への貢献を理由に市民権を要求したことをめぐる問題性が分析される。ダリトとは

対照的に、アフリカン・アメリカンは、周囲との同一性、すなわち自分たちはイギリス系やアイルランド系など他の移民と同じくらいアメリカ人であると主張して、アメリカ人としての権利を要求した。つまり、アフリカン・アメリカンにとって権利問題は、「外部であること」ではなく「内部であること」の問題だった。

アメリカ民主主義の歴史は、その普遍主義に重要ポイントがある。アメリカは、国内で女性や黒人や先住民を排除しているにもかかわらず、民主主義と自由主義が国外にも適用可能であると信じてきた。第二次世界大戦も民主主義と自由を守るための戦争と正当化し、「二重の勝利」(民主主義の敵と植民地主義への勝利)をスローガンに掲げた。近代国民国家では、政治的権利は国土を防衛して初めて発生すると考えられてきたため、第二次世界大戦中、アフリカン・アメリカンは、国のために戦う権利を要求した。その結果、連邦政府は軍需産業における雇用差別禁止措置を採ったが、南部では実質的に人種差別政策が存続していたため、これを批判する声があった。ただし、人種偏見は南部に限った問題ではなかった。黒人女性作家のゾラ・ハーストンは、北部にも可視化されない偏見があると喝破し、人種偏見は全国問題として認識されるべきであると訴えた。

第二次世界大戦期のアフリカン・アメリカンの市民権闘争は、ミリタリズムに基づき黒人男性と白人男性との同一性を主張するものであり、その結果、女性は「違う」ものとみなされた。黒人女性は、後援者、戦死者を悼む者として表象され、男性が庇護する客体とされたため、権利主体とはみなされなかったのである。

第5章は、アフリカン・アメリカンが何に縛られ葛藤してきたかを、黒人女性の自伝をもとに考察する。サバルタンの自伝は、個別的な語りよりもサバルタン・コミュニティ全般の物語を反映しているといわれる。しかしここでは、個々の「私」、とくに黒人女性に着目し、コミュニティ内部の葛藤を描き出そうとしている。ヴィオラ・アンドリュースは、その著作の中で人種政治にほとんど言及していない。ゾラ・ハーストンが、黒人年配者の経験を自己のものとして語っているのに対し、ヴィオラは、「同胞／よそ者」関係の中に自分を位置づけること

なく、家庭内で苦悩する己の姿を活写する。ヴィオラの生活は「アメリカの常識」の構成要素であるキリスト教道徳観とマスキュリティに縛られていた。家庭内でことさら「男性性」を誇示して暴力を振るう夫から逃れて別居したことについて、この「解放」を喜びながらも、夫を見捨てたという罪悪感を抱き続けた。出産育児も女性の責務と任ずるがゆえに、避妊しようとする自分にうしろめたさを感じていた。彼女の苦悩とジレンマは、女性、キリスト教徒としてあるべき姿（常識）への明確な意識から生じたといえよう。

ヴィオラの家族は、白人と黒人の境界は外見と出自では線引きできないという典型例である。白人の父と白人・黒人・先住民の混血の母をもつ夫は、見かけは白人だが、そのことを恥じていた。しかし言動は「白人的」であり、「黒人は目立つ存在になるべきではなく教育も不要だ」と考えていた。このような家庭環境も手伝って、ヴィオラの語りには奴隷と解放のモチーフが現れるものの、白人の圧制と黒人の解放という標準的な語りとはズレがある。むしろ家父長的権力の抑圧が、彼女の語りに影響を与えている。黒人男性は、民主主義、近代国家のマスキュリティとミリタリズムゆえに同一性を主張して身体を書き換えるに至ったが、黒人女性は、黒人であると同時に女性であるがゆえに、近代国家のキリスト教的、家父長的道徳観に縛られ葛藤したのである。

第6章では、ダリトの自伝をもとに、個人と集団の関係性の変容が語られる。ダリトの自伝では、主体と客体の区別がなくなる場合が多く、時に無自覚に一人称から三人称にスライドする。このスライドは2つの傾向の表れであるという。ひとつは、長年他人に所有されてきた残滓として自我を強調することを躊躇する傾向、もうひとつは、差別体験を集団的なものとして共有する傾向である。それゆえダリトの自伝は、一個人の自伝というよりむしろ社会伝であるといえる。しかし、カンブレとジャーダヴの作品は、ダリトの自伝の伝統から脱却するものとして重要な意味をもつ。カンブレのそれは、ダリト社会の家父長主義的關係性とそれがダリト女性に及ぼす影響についての「内部からの告発」になっている。一方ジャーダヴの作品は、カーストを脱したグローバルな市民としてのダリト家族の物語である。

カンブレの語りは、「マハール一般」^(註2)の惨めで迷信的で非合理的な身体に言及しつつも、女性の身体の被抑圧性をも浮き彫りにしている。彼女たちは家父長主義的秩序の下で常に過剰な労働を強いられ、規範に縛られ、懲罰を受けてきたという。しかしカンブレは、女性の苦悩よりも「マハール一般」の苦悩を優先する。つまりカンブレは、ダリトとしての自己を選択し、女性が直面する問題を認識しつつもそれを「逸脱」した「些末」な事例として周縁化したと解釈できる。

父のダームー、ナレンドラ、娘のアブルヴァと複数の声で語られるジャーダヴ一家の物語は、アンベードカルの闘争に関連しつつも各個人の物語になっている。女性にも個人としての自覚への萌芽がみられる。個人主義の表出は、第3世代アブルヴァの語りで頂点に達している。まず、彼女が16歳で自伝を書くことを躊躇したという事実が、アメリカ生まれの彼女が「自分が属するコミュニティ」の差別経験を自分のものとして共有していないために、そもそも書く必要性を感じなかったことを推測させる。2007年出版のマラーティー語版第5版に掲載された、「私はアブルヴァであり、グローバルな市民であり、カーストも宗教も関係ない」という言葉に、彼女の自立的な自己が鮮明に表現されている。続いて彼女は、ダリトの祖先の犠牲の上に拓かれた道について語るが、「バーバーサーヒブ博士（アンベードカルのこと——評者注）が渡してくれた松明をもって周囲を照らしつつ、自分の将来を作っていく」という表現にみられるのは、ダリトの一員ではなくあくまでも一個人としての自己である。

第7章は、近代国家／社会の「常識」と偏見が、権利を奪われた人々に及ぼす影響を考察する。ヒンドゥー右派は、「ヒンドゥスターンに住みたいと思うならば、我々のように生きなければならない」と主張する。政治学者のハンチントンは、「メキシコ系アメリカ人は、英語で夢を見る限りにおいてアメリカン・ドリームを夢見ることができる」とコメントしている。両者の発言は、マイノリティに対し「主流」を模倣するよう強いている。しかし果たしてそれは可能なのか、と著者は問いかける。

ダリトやアフリカン・アメリカンは、たとえ貧困から脱却しミドルクラスに入っても差別、監視の対象となり、近代主義者が言うところの無標の私人化

した個人になることはできない。たとえば、コラムニストのアナトール・プロヤールは、色白だったこともあり白人で通した。彼は常に「黒人であるというだけで差別や不利益を被る状況にあって、白人で通すことができるのになぜそうしてはいけないのか」と苦悩した。逆に哲学者のアドリアン・パイパーは、常に自分を黒人と意識し行動してきたが、「白人として通すことをしないという選択は当時の己の無知から出たもので、後に深刻な報いを受けた」と告白している。インドの低カーストが主流に溶け込む方法のひとつは、改宗してヒンドゥー・コミュニティから脱却することであった。しかし、ダリトは改宗しても差別された。もうひとつの方法は、新しい姓を採用することである。家族名はカースト出自を示す指標であるだけに、姓に関する闘争は、「～で通す」、あるいは特定階級やグループに入るための重要な要素であった。ダリトは、出身地名、社会的地位の名称などの「中立的」な姓を採用して差別に対抗した。

しかし、このような「～になる」行為に対しては、さまざまな方面から圧力がかかる。2001年、あるダリトのコラムニストがヒンディー語紙に「ダリトの諸問題」という連載を開始すると、さまざまな反応があった。ダリト若年層からは、社会改革運動に貢献する決意を伝えたり支援を求めたりする手紙が寄せられた。つまりこのコラムニストは、著述家である前にダリト指導者とみなされ、その役割を果たすよう求められたのである。一方、あるバラモン男性は、コラムニストに対し、ダリトや低カーストであるという感情から脱却しインド人としての自覚をもつよう仲間に促すべきだ、と論じてきた。しかしこの男性の意見は、インド人としての自覚を促しておきながら、コラムニストがインド人全体ではなくダリトの指導者としての役割を果たすことを当然視していることを露呈している。そもそも「あなたはまずインド人なのか、ダリトなのか」という問いは、決して高位カースト・ヒンドゥーには投げかけられることはない。なぜなら、彼らこそが主流であり自然に国家そのものであるからである。

主流が規定する社会の常識と偏見は、権利を奪われた人々に思わぬ形で影響を及ぼしている。たとえば、一度市民権がマイノリティに与えられると、主流の要求は巧妙に変化する。アンベードカルに対し

て高位カーストの国会議員が気分を害した原因は、アンベードカルの活動や政治思想ではなく彼の態度や振る舞いだった。後から権利を与えられたグループは、より控えめで、より理性的で、一言で言えば「我々より我々の」でなくてはならない。しかしそれに従うことは極めて困難である。なぜなら「我々」「より～」の境界は可変的であるからだ。これが普遍的な偏見の狡猾さ、自分で自分を規定できる無標の主流の狡猾さである、と著者は結論づけている。

II 本書の意義と考察

以上みてきたように、本書は基本的に近代批判の書であり、「自立的な個としての市民」「市民の平等」などの近代言説の欺瞞を暴いている。ただし、近代市民の意味するところが実質的にはブルジョワ成人男性であり、労働階級や女性、移民が当初は排除されていたという点は、著者に限らず、これまでも多くの研究が指摘してきた。著者の研究の特徴は、この近代批判をさらに推し進めて、制度上は普通選挙制度を実現するなどして差別が消滅したことになっている今もなお、近代国民国家／社会そのものが偏見を内在させていることを指摘した点にある。

「普遍的な偏見」と「ヴァナキュラーな偏見」という2つの「偏見」概念が、近代国民国家／社会が内包する差別抑圧構造を浮かび上がらせる効果を發揮している。「普遍的な偏見」とは、そもそも理性やあるべき振る舞いなどの「近代性」がすべて支配的グループによって規定され、通常は表面化することさえない偏見を指す。その一方で近代は、あからさまな人種差別やジェンダー差別、カースト差別を例外的事象として扱い、逸脱した些末な行為として等閑視する。したがって「ヴァナキュラーな偏見」とは、実は「普遍的な偏見」が表面化し顕示されたものであり、それゆえ「普遍的な偏見」によって周縁化され隠蔽されるという悪循環を、著者は喝破したのである。

また、著者は、黒人女性およびダリト女性の自伝を詳細に分析することにより、サバルタン・コミュニティの内部にも抑圧的搾取的構造が存在すること、そしてそれがサバルタン自身によって隠蔽され

てきたことを指摘している。この指摘を著者の主張にそって再解釈すれば、サバルタン・コミュニティにも「普遍的な偏見」が内在し、内部の矛盾を「逸脱」した「些末」な事柄として周縁化していると考えることができよう。

成功した元サバルタンの個人が出身コミュニティのアイデンティティから自由になり、主流（たとえばインド国民）として行動しようとするのを、主流グループと出身コミュニティの成員がともに許容せず、出身コミュニティを代弁するよう陰に陽に強要する問題性を我々に突き付けた意義は大きい。我々も、優遇策を利用して成功した個人が己の生活に専心するのを見て、コミュニティの地位向上のために闘わない冷淡な人物と無意識のうちに評してはいないだろうか。つまり、「主流」に位置する我々は、己のため／家族のために働き生活しそれ以上の政治社会的活動をしなくても当たり前としながら、「非主流」の人々に対しては、その「当たり前」を否定してはいまいか。類似の問題として、我々は、リンカンの伝記を読むとき、それを「白人文学」と呼ぶことなく、欧米白人コミュニティ全般を知るための資料とみなすこともなく、あくまでも個人の特質を読み取ろうとするのに対し、黒人やダリトの自伝に対しては、コミュニティの特質に関する情報が与えられることを期待し、個としての著者をコミュニティと同一視しているのではないだろうか。このようなまなざしは、たとえばダリトにインド人としての自覚を促しながらインド人を代弁することを許さない高位カーストのそれと軌を一にする。我々も、アメリカやインドにおいて展開されている「偏見」の問題を自分とは無縁のものとして周縁化することなく、己を省察することが求められている。

なお本書は、アメリカのアフリカン・アメリカン

とインドのダリトを対置して分析しているところに最大の特徴があるが、その比較検討がさほど効果を上げていないように感じられる。近代国民国家／社会の欺瞞を暴く2つの並列事例として、両者間の共通項は挙がっているが、相違点は見いだせないであろうか。「不可触民」差別問題がインド民主制の成立後70年以上経っても解決されない原因を、すべて近代の偏見の問題に還元してしまうことは、果たして妥当なのであろうか。現代社会に根強く残る偏見、差別の責任をすべて近代に帰することによって、また不可視化され周縁化されるものが生じていると推測される。著者の次回作には、両者間の「違い」が明らかにされることを期待したい。

(注1)「ヴァナキュラー」という語には、ここでは「正しくない、前近代的な特定地域や集団に限定される、非合理的なもの」などの多様な意味が込められている。

(注2)マハールとは、ダリトに分類されるカーストである。アンベードカルもマハールの出身である。

文献リスト

- Pandey, Gyanendra 2006. *Routine Violence: Nations, Fragments, Histories*. Stanford: Stanford University Press.
- ed. 2010. *Subaltern Citizens and their Histories: Investigations from India and the USA*. Oxon: Routledge.
- ed. 2011. *Subalternity and Difference: Investigations from the North and the South*. Oxon: Routledge.

(専修大学文学部歴史学科准教授)